

編集後記

◆昨秋来、いまほどこの国の将来を暗澹たる思いで見つめたことはない。年賀状にも怒りと不安の声々。終戦時10歳。新憲法まつさらの教育を受け、教師や周囲の大人の姿貌変化をつぶさに見てきた私たち世代である。

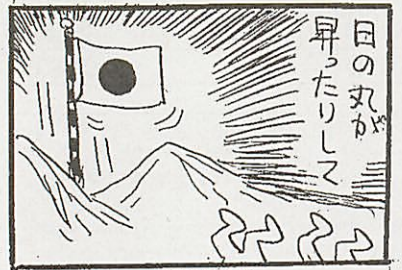
アベさんカッコイイと馴染みの歯医者(腕の良い30代女性)が言う。長身でお洒落だから。靖国参拝の是非を問うアンケートでも賛成が過半を越えるものがあつた。若い世代への働きかけが必要、と切に思う。(いくみ)

◆ひとまず校正を終え、今回も力作満載号を送りだせるのは嬉しい。安倍の暴走ぶりは上掲諸論文で完膚なきまでに批判しつくされているが、われわれの力だけで安倍のはねあがり食いよめることができないのは歯がゆいかぎり。個人的には、これまでさまざま

な闘いに参加してきたが、安倍のような鬼っ子と、彼を支持しているらしい若い世代を生み出す結果になぜなつたのか? 読者の皆さんとともに、足を止めて考えてみたいところだ。(高橋武智)

◆米アカデミー賞の呼び声が高いステイヴ・マックイーン監督の「それでも夜は明け」を試写で見た。例年、同賞候補作品にはあまり関心が持てないことが多かったが、これは見応えある力作。1840年代に奴隷商人に北部で拉致され、南部ジョージア州で1年余りも奴隷として働かされた黒人の物語。たつた170年前に起きた実話だという。以前に見たドキュメンタリーの中で、ノーム・チョムスキーが学生に「人類は進歩しているか」と訊かれ、「少なくとも奴隷制度はなくなった。これは進歩じゃないか?」と答えていたのを思い出した。(本野義雄)

◆「秘密保護法」廃止へ! 実行委主催の、



2013.12.15.10:30PM

国会スタート時点での包囲抗議行動に、フラフラする足取りで参加。その後「校正」のために事務所へ。この「後記」を書いているスゴイ時代になってしまったものだ。闘病中の身にはこたえる。(天野恵一)

◆今号の特集は「安倍反動政権打倒!」。絶叫調のアジテーションは小誌に似合わないがここまで来ると、もう他に訴えるべき言葉が見つからない。シナリオ通りの安倍政権の攻勢に、ひたすら退却戦を余儀なくされる市民の悲鳴が聞こえてくるような気がする。

そんな中、1月19日に行なわれた沖縄県名護市長選挙では、稲嶺進氏が再選を果たした。米軍普天間飛行場の辺野古への移設を目指す安倍政権に一矢を報いる形にはなつたが、自然と生活を守る沖縄の人々のまっすぐな気持ちは、政治ゲームとは無縁のものだろう。そして選挙運動さなかの東京都知事選。宇都宮氏と細川氏の二人が共に脱原発を標榜して名乗りを上げたが、残念ながら候補者の一本化はならなかった。そしていま、原理原則を貫くのか、結果を求めるのか、市民一人ひとりが悩ましい選択を迫られている。

今号は紙数の都合により、巻頭詩と事務局だよりはお休み致しました。(野澤信一)

編集委員

阿部めぐみ、天野恵一、有馬保彦(次号担当)、杉内蘭子、高橋武智、西田和子、野澤信一(本号担当)、本野義雄、諸橋泰樹、吉川勇一、吉田和雄